

長男が同名

は大洋漁業釜石事業所で第七あさひ丸に乗船していた頃、僚船第二南海丸に南條さんと云う通信士が居た。

岩沼市の隣、国道六号線添いの逢隈部落出身で、私と同じ電波学校を卒業後、は釜石に入社していた。どちらも百屯足らずの漁船であるが、あさひ丸は鮪延縄船、主に南方赤道直下に母船式船団で操業する。南海丸は、北方千島列島近海で、鮭鱒漁、船団を組んで操業する。どちらの母船も一万吨以上の大型船だ。

私は昭和二十七年に結婚、長男が生まれる二十九年には赤道直下に居た。早春、宮古港から出漁したが、妻は子供を宿した体でテープを片手に、船員一同の家族と共に手を振って送ってくれた。

四、五日前に宮古に来て、浴場を経営している旅館に泊まって居たが、その時、男の子が生まれたら、大洋漁業の洋、太平洋の洋をとって洋一、女の子だったら洋子と命名しようと話合った。

南條君は前年結婚し、一ヶ月足らず結婚生活を送っただけで、北洋の鮭鱒漁に船団を組んで出港して行った。鮭鱒漁は厳寒期の操業だ、北洋オホーック海の冬は荒天が続く、毎年遭難が多い。その年、あさひ丸が宮古出港の時は南條君の乗った南海丸は北洋で操業中だった。

赤道洋上で南海丸の遭難の知らせを受信した。荒天で大波を被り転覆、多くの船員は水温〇度近くの荒海に投げ出され、近くで操業中の僚船に救われ助かったのは、少人数だったようだ。船内において船と運命を共にした人もいる。南條君は、無線室でSOSを打電する間もなく、船と運命を共にした。結婚後始めての出漁だった。奥さんのお腹には新しい命が息づいていた。

子供が生まれたら洋一、洋子と、南條君と私の考えが同じだった。翌年南方操業より帰港後、船長が下船すると言ったので、私も別の船長に宮使いするのが嫌になり、皆の意向もあり、退職し妻の居る故郷に帰った。

下船後逢隈の南條君生家にお悔やみに行った。お母さんにお会いし、「船を辞めてよかったね」と涙を流され、諸々の話をお聞きし、人生の無常を感じ帰宅した。

奥さんには男の子が生まれ、洋一と命名したとの事。奥さんは小学校の先生で、近くで生活しているそうだ。何年か後に南條君の弟と、継縁したと風の便りが届いた。